「将来なりたい技師」を発表

関甲信・首都圏支部学会で学生フォーラム

自身の将来像を発表した群馬県内養成校の学生たち

10月27日に高崎市で開催された日本臨床衛生検査技師会関甲信支部・首都圏支部医学検査学会の日臨技企画・学生フォーラムでは、群馬県内の養成校の学生6人が登壇し、「将来なりたい臨床検査技師」をテーマに発表した。

学生フォーラムでは、群馬大学の福山ひかる氏、渡辺早貴氏、村上有希氏、群馬パース大学の吉川千尋氏、奈良拓弥氏、唐木望氏が登壇。臨床検査技師を志望した理由や、今後の就職や進学の希望について発表し、将来の理想像も述べた。

福山氏は、医療職に就きたいという思いがあり、さまざまな職種を調べている中で臨床検査技師を知った。臨床検査技師の仕事は治療や診断に必要不可欠であることや、疾患や治療について専門的な勉強ができる点に魅力を感じた。大学の臨地実習で責任感を持って働く臨床検査技師の姿を見て、医療職として患者のために働きたいという思いがより強くなり、大学卒業後は病院への就職を希望している。

将来については、1年目は仕事に慣れること、5年後に認定資格の取得や後輩の指導に奮闘、10年後には学会発表など病院外でも活躍する姿を描いていると話した。

奈良氏は、医療職のなかでも国家資格取得後の活躍の場や選択肢の広さに魅力を感じ、臨床検査技師を志望した。大学での勉強を通して、臨床検査技師の業務内容が多岐にわたることを実感し、企業や病院、検査センターなど卒業後の進路もさまざまであることを知った。自身は卒業後に検査試薬メーカーへの就職を選択した。臨床経験がないまま企業に就職することになるが、臨床検査の知識を生かし、臨床側と製品開発側の考えの溝を埋める役割を担いたいとの考えを示した。

司会を務めた日臨技専務理事の滝野寿氏は学生の発表を受けて、「臨床検査技師として、何をしたいかというコンパス（道標）を持ってほしい」とメッセージを送った。また検査技師の今後のテーマとして、「高度な専門性を備えた臨床現場の人材養成」「イノベーティブなラボを導くマネージメント力」「臨床検査に生かせる論理思考力」を挙げた。このほか、医療安全の観点からさまざまな部門のガイドラインを定めて普及することや、認定臨床検査技師を中心に検査法などの標準化を進め、さらにガイドラインを策定し、啓発することも必要と指摘した。